

ポストコロナの 可能性としての

〈女子たち〉

足下のユートピア

檜木祐人「ハクメイとミコチ」(二)

池上貴子

二、ファンタジーで考える〈共生〉〈共存〉

SDGs (持続可能な開発目標) の浸透により〈共生〉・〈共存〉という言葉は、産業のみならず、経済や教育の領域で今やパワーワードとなっている。しかし、この〈美しい〉概念は、〈平等〉の地盤を必ずしも必要とはしておらず、なんだか危うい。一見、他者に対してフラットであるはずの言葉だが、突き詰めれば〈共生してもよい〉という、相手に対する承認関係を含んでいることに気付くからだ。いわば、共同体の優位者である支配者や上位組織、そしてマジョリティといった〈権力〉と結びつきやすい言語のようでもある。

実際、共同体での権力関係を担保とし、〈共生〉・〈共存〉を呼びかける(言語として発する)ことができる〈資格〉を強者側にだけ与える例は歴史的にも多い。大東亜共栄圏や民族共同体構想にみるように、一部の民族、人種、国民が、原理的な統一を強いる〈暴力〉を発動する際の建前¹プロパガンダとしてこの概念は繰り返し利用されてきた。このような権力構造が組み込まれた〈共生〉・〈共存〉という言語領域では、社会的に弱い立場に置かれた人や〈マイノリティ〉と称される人が片隅でかろうじて生きながらえている世界を「共生社会」と呼ぶことがある。置かれた状況の中で、何も見えず聞こえなくとも「普通に」生きられる共同体の強者²マジョリティが持つ言語によって〈共生〉は一方的に承認されているためである。ジャーナリスト小川たまかが「『ほとんどない』ことにされている側」の間³間と呼び、可視化しようとしたのは、何も女性だけではない。⁴マジョリティさえも、〈個人〉を分別する社会の「軸」が移れば途端にマイノリティにカテゴライズされていくだろう。流動的かつ独立した無数の〈個〉を恣意的に分割し、固定的・階級(階層)的な枠組みで理解しようとする世界の認識法は、もはや限界が来ている。

前回から取り上げている檜木祐人『ハクメイとミコチ』(エンターブレイン)は、これらの権力関係を担保としない

〈共生〉・〈共存〉の世界を、漫画独自の表現方法を通して模索している作品といえる。主人公は身長九センチメートルの「小さな人」族である二人の〈女子たち〉であり、彼女たちの同居生活は、社会的に固定されがちな男女の役割（社会的性差）からそもそも解放されている。加えて彼女たちが暮らす町「マキナタ」は「旅人の作った町」であり、流動性をアイデンティティとした共同体として設定されている。「マキナタ」では、移り住んできたハクメイとミコチを含めた女性たちの殆どは手に職を持ち、動物や昆虫といった〈住民〉と異種混合の生活を営んでいく。共同体に「旅人」という流動的な要素を組み込むことで、固定化や階級化されない共同体や、権力をベースにしない異郷の者・異質な他者との共生・共存の模索という作品のモチーフがおのずと読者に伝わる仕組みになっているのである。

ジェンダーフリーは共存の試金石

世界経済フォーラム（WEF）が二〇二一年に発表した「ジェンダーギャップ指数」（国別の男女格差の数値化）において、日本が世界一五六か国中一二〇位であり、主要先進七か国で最下位というのは、端的にこの国が平等でも文化的でも先進国でもないことを明らかにしている。なお『国土交通白書2021』では更にこの数字を掘り下げ、女

性の管理職が二三・三パーセント、上場企業の役員の割合一〇・七パーセントという低い水準である点を示し、問題視している。

『ハクメイとミコチ』の世界は、わずか十巻の間に六八名の職業人が登場し、約五十種類もの仕事にまつわるエピソードが語られており、いわば「仕事漫画」としての側面も持ち合わせているのだが、仕事におけるジェンダーギャップはどうなっているだろう。現在発行されている十巻のうち、調査対象を「名持ちのキャラクター」または「名無しだがその回で複数回対話をするキャラクター」に絞り調査してみた。

その結果、対象としてピックアップされた六八名の内訳は、男性は三八名（五五・九パーセント）、女性は三十名（四四・一パーセント）であった。更に言えば、この統計結果は、ハクメイの仕事仲間である大工の「石貫會」いわぬきかいメンバーが男性七名で、男性比率を大きく上げていることもあり、業種単位でみた場合のジェンダーギャップはほぼ無いと言っているだろう。また特筆すべきは、管理職や経営者が殆ど女性である点である。例を挙げれば、商隊隊長の緑尾狼や、多数の職人を抱える経営者のスズミ、温泉宿を起業したブブアギリなど。管理職や経営者、仕事の先輩（車掌や看護師）の多くをあえて女性に設定しているのは旧来